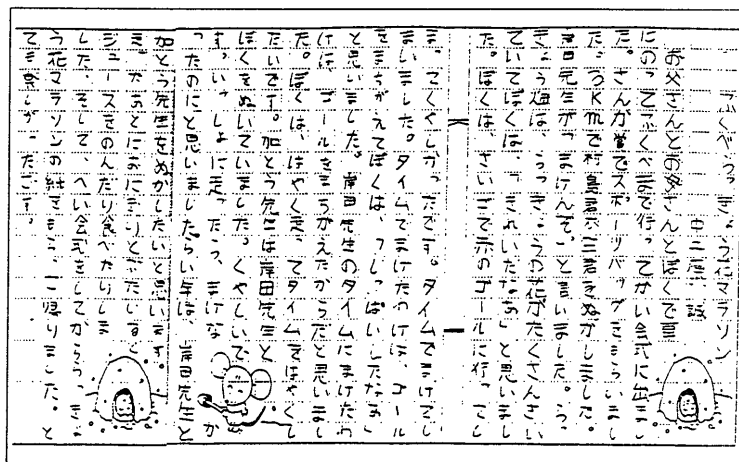


この毎年の実践でよく分かる。最初は学校がリーダーシップをとるが、いずれは家庭で主体的に活動に参加してほしいと願っている。

「ふくべらっきょう花マラソン」も回数を重ねる毎に参加者も増え、家族と一緒に大勢の人々の中にまじって楽しむ姿が見られるようになった。こう言った機会を足掛かりにして、主体的に生活を楽しもうとする素地を家庭でも養っていくよう、働きかけていきたい。



マラソンをしているH男



H男の作文

[5] 家庭との連携

中学部の生徒は、心も体も成長期にある。発達の遅れはあっても、体はその子なりに着実に成長し、それに伴い、ゆっくりではあるが大人に近づいているのである。そのことに本人が気づいているか否かは別にして、周りの人からは「大人」として扱われる。したがって、「中学生らしい」姿勢や態度を育てようという意識は、教師、本人、親それぞれが持つことが当然必要になる。

生徒は、中学部に入学したことで、「中学生だ」と自覚するようで「もう、小学部ではない」ということに自負心を持っている。しかし、「中学生らしい」態度というものは、具体的な場面をとらえて教えることが必要である。周りの大人の接し方で学ぶことも多い。そうして行くうちに少しずつ大人に近づく自分の心や体を自覚できるようになっていくのである。

中学部という時期は、思春期であり、「親離れ・子離れ」の大切な時期であると考え。そこで、家庭と連携を取り合って個々の生徒の実態に応じて、柔軟に生徒の心や体の変化に対応していきたい。将来的に生徒を支える基盤は家庭にあることを重視したい。

《家庭との連携の視点》

- 学習のねらいや取り組みを、絶えず具体的に家庭に知らせ、学習したことが生きた力となるような実践の場を家庭でも工夫してもらう。
- 学校の話題や生活の様子を子どもから引き出すような雰囲気づくりを心掛けて、声かけをしよう。
- 学校での学習を発展的につなげたい催しや計画がある時は、保護者にも参加を呼びかけ、生徒と保護者が主体的に活動をしようとする気持ちをバックアップする。 (田村)